

薦つた

王おう

外傳
瑠璃るりとお菓子2

目次

6	瑠璃と魔法	1	瑠璃とアブリコット	2	瑠璃と眼鏡	3	瑠璃と花	4	瑠璃と恋の悩み	5	瑠璃と遺されたもの	6
142	7	40	70	98	121	142	165	194	217	243	269	269
おまけ	7	8	9	10	10	おまけ	165	194	217	243	269	269
瑠璃とレモネード	瑠璃と邂逅	瑠璃とアップルパイ	瑠璃と祝砲	瑠璃と赤子	瑠璃とアップルパイ	瑠璃と祝砲	瑠璃と赤子	瑠璃とアブリコット	瑠璃と花	瑠璃と眼鏡	瑠璃と魔法	瑠璃と魔法



登場人物 紹介

▲ルドヴィーク▲

(18歳)

クロヴィスの弟で、
現在の皇帝陛下。

▲ヴィオラント

(28歳)

クロヴィスの兄で、
先の皇帝陛下。

▲スミレ (16歳)

ヴィオラントの妻で、
妊娠中。
実は異世界出身。

▲アーヴェル (30歳)

隣国コンラートの王兄。

王位は継がず、乳牛の
飼育と研究こそが生きがい。

▲ロイス (5歳)

クロヴィスの屋敷の
養い子。クロヴィスを
とても慕っている。

▲シェリーゼリア

(24歳)

隣国バトラーシュの
皇女で有能な女宰相。
クロヴィスとは幼馴染。

▲クロヴィス (24歳)

グラディアトリアの宰相閣下。

冷徹で厳しい人物と恐れられている。
別名「鬼の宰相」。

▲ルリ (18歳)

没落貴族の娘だが、現在は
グラディアトリアの母后陛下に
仕える侍女。お菓子作りが得意。

▼ちびセバス

自ら意思を持ち、動くことのできる鳩。
宰相閣下の補佐官を自任する。

1 瑠璃と魔法

大国グラディアトリア。

現在この国に君臨するのは、若き皇帝ルドヴィーグ・ファイア・グラディアトリア。彼の統治のもと、人々は平和な世を謳歌^{おうか}していた。

その治世を支えるのは、腹違いの兄であるクロヴィス・オル・リュネブルク公爵。

先々代皇帝の側室の子として生まれたクロヴィスは、皇妃の子であるルドヴィーグを玉座に就かせるため、早々と皇位繼承権を放棄。そして、同腹の兄である先の皇帝——現在はグラディアトリアで唯一、大公爵位をあずかるヴィオラント・オル・レイスウェイクの治世の終盤、二十歳の若さで宰相に就任した。

彼は、父譲りの金髪に空色の瞳、絶世の美女と名高い母譲りの美貌を備え、數多^{あまた}の貴婦人達を虜^{とり}にしながらも、いまだ独身。女性と後腐れのない大人の関係を楽しむことはあっても、特定の相手を作らないことで有名だった。

一見、柔らかな物腰の紳士であるが、その瞳は容易に人を寄せつけぬ冷ややかな光を宿し、仕事となれば自分にも他人にも非常に厳しい。そんな彼の異名は“泣く子も黙る鬼の宰相”。

ところがある時を境に、その宰相閣下の雰囲気が目に見えて柔らかくなつた。

「——ねえ、あなた。ちょっと……」

「はい？」

ルリは、グラディアトリアの王城に住める侍女である。

まとめている長い髪は栗色。亡き母に似たありふれた色ではあるが、同じく母譲りの深い青色の瞳とともに、ルリはとても気に入っている。

この日、侍女頭の使いを終えて、王城の廊下を歩いていた彼女を呼び止めたのは、まだ成人も迎えていないであろう幼げな令嬢だった。

「あなたが噂のルリでしょう？ 少し付き合いなさい」

どこか高慢な物言いなれど、大きなはしばみ色の瞳を好奇心でいっぱいにしてルリを見上げている。

お付きの侍女らしき年嵩^{としかさ}の女性が、「お嬢様、こんなところで」と戸惑っているが、令嬢はかまわず続ける。

「ねえ、私、好きな方がいるの。あなたの惚れ薬を少し分けてくださいない？」

「まあ……」

ストレートな要求に、ルリは思わず心の中で苦笑した。

ルリが初対面の令嬢から、いきなり「惚れ薬をくれ」などと言われるのには訳があった。

何を隠そ^うるリこそが、あの鬼の宰相クロヴィスを丸くした張本人なのである。

これまでどんな美女と付き合おうと、その女性に決して自分の恋人と名乗ることを許さなかつた彼が、ルリの肩を抱いて「私の大切な人です」と公言するようになったのは、今から三ヶ月ほど前のこと。

難攻不落の鬼宰相のメロメロぶりに驚き戸惑つた周囲の人々が、ルリに注目するのは当然だつた。特に、恋愛事に敏感な女性達——今ルリを期待の眼差しで見上げている令嬢のような、夢見るお年頃の少女達の間では、『魔女ルリの惚れ薬』が秘かに噂になつていた。

なんでも、「ルリは惚れ薬を持つていて、宰相閣下はそれを食べて彼女の虜^{とり}になつた」というのだ。もちろんそんな事実は一切ない。魔女だの惚れ薬だのルリにとつては不名誉極まりない話なのだが、恋する乙女達に悪気はない。それどころか、期待と憧れいっぱいに「惚れ薬を分けて」と近づいてくる。

そんな彼女達に、ルリはいつも苦笑を浮かべて応対した。

「申し訳ございません、お嬢様。惚れ薬というものは私も持っていないのです」

「まあ！ じゃあ、あなたはどうやつて宰相閣下のパートナーになつたの？」

令嬢はきよとんとし、首を傾げてざらに問うた。

「あの……私はお菓子を作るのが大好きなのです。^{せんえい}僭越ながら、それを閣下に召し上がつていただいたことがご縁の始まりでございます」

たまたまクロヴィスからお菓子作りを頼まれたのをきっかけに、ルリが手作りお菓子を持って宰

相執務室を訪れるようになったのは数ヶ月前のこと。そしてその度にクロヴィスは自ら淹れた紅茶で彼女をもてなしてくれ、一緒にお茶を楽しんでいた。

やがて、意外に甘いもの好きの宰相閣下はルリのお菓子を味わいながら、それよりもずっと甘い言葉と眼差しを彼女に向か始める。

そしてルリの方もいつの間にか彼に初めての恋心を抱くようになつたのだ。

「お嬢様は、お菓子はお好きですか？」

「ええ、もちろん好きよ」

ルリの問いに、令嬢は素直に頷いた。

「では、お嬢様のお好きなお菓子を、意中のお方にプレゼントされてはいかがでしょうか。お茶と一緒においしいお菓子を召し上がれば、きっと会話も弾みます」

「まあ、素敵！」

令嬢はルリの提案に顔を輝かせたかと思うと、すぐに頬を染めて、もじもじしながらさらに問うた。

「あなたのように手作りすれば……あの方は喜んでくださるかしら？」

恋する乙女の可愛らしいことといつたら。

ルリはにつこりと微笑んで頷いた。

「ええ、きっと」

「私、頑張ってみるわ」

令嬢は晴れ晴れとした笑みを浮かべ、侍女を引き連れて去つていった。

彼女が恋するお方とは、一体どんな男性なのだろう。

可愛らしい少女の想いが通じることを願いつつ、ルリは温かい気持ちでその背中を見送った。

そして、自分も早く仕事に戻ろうと歩き出したところで、再び声がかけられる。

「——なるほど、今のが噂の“ルリの魔法”的正体ですか」

「ク、クロヴィス様!？」

くつくつと笑いながら、少し離れた柱の陰から現れたのは、宰相クロヴィスその人であった。実は“魔女ルリの惚れ薬”に縋ろうとした乙女達のうち何人かは、先ほどの令嬢と同じように、ルリに手作りお菓子のプレゼントを提案され、それを実行に移していた。

その結果、実際に何組かカップルが誕生したため、噂はますます広がることとなり、ついには宰相執務室のクロヴィスの耳にまで届いたらしい。

「立ち聞き失礼。声をかけようとしたら、先ほどのお嬢さんに先を越されましてね」

クロヴィスがちらりと視線を向けた先では、先ほどの令嬢が回廊の角を曲がっていくところだつた。

「私のルリを苛めるようなら、おチビさんでも容赦しないつもりだつたんですけどね」

そう言つて眼鏡の奥で鋭く目を細めた彼に、ルリは慌てて訴えた。

「意地悪なさる方なんて、もういらっしゃいません」

確かにクロヴィスがルリとの関係を公言し始めた頃は、それを妬む女性達からきつい視線や言葉を浴びせられることが多々あった。

しかし、ルリの姉役を自負する侍女仲間達が団結して守ってくれたし、何よりクロヴィス自身がルリに対する無礼を一切許さなかつた。

おかげでルリに辛くあたる輩は、鬼の宰相閣下の不興を買つてはたいへんとばかりに、すぐに鳴りを潜めたのだ。

「そのですね、安心しました」

クロヴィスはにこりと微笑むと、ルリの前に立つて彼女の片手をそつと握つた。

「少し時間ができたので、これから義姉上様のご機嫌伺いに行こうと思うのですが」

「まあ」

「ルリも一緒に来てくださいますか？」

「はい、ぜひ！——あつ……でも、あの……」

「大丈夫。先ほど義母上からあなたを連れていく許可をいただいてきました」

ルリの主人は、グラディアトリアの國母エリザベス・フィア・グラディアトリア母后陛下。

現皇帝の生母であり、生まれ落ちると同時に母を亡くしたクロヴィスと、その兄ヴィオラントを、実の子と分け隔てなく育てた慈愛溢れる女性である。

ルリもまた、侍女とはいえ、彼女から実の娘のように可愛がられている。

ルリは、かつて栄華に溺れて道を踏み外し、先帝陛下によつて処刑されたウインセット侯爵の庶子として生まれた。

母は古くから続く大きな商家エリュッセの出身であつたが、かの家はウインセット侯爵家が没落

して母子が路頭に迷うかという時も、一切救いの手を差し伸べてこなかつた。

代わつて彼女達を手元に引き取つたのが、母后エリザベスである。彼女はその後、十二歳で母を亡くしたルリの後見も買って出てくれた。

ルリの母后陛下に対する感謝の気持ちは計り知れない。実のところ結婚せずに一生侍女として彼女に仕えたいと思っていたほどだ。

しかしながら、母后陛下はクロヴィスとルリの関係をとても歓迎してくれている。

我が子のように慈しんで育てた二人が恋に落ち、幸せそうに微笑み合う姿を見て、母である自分もこの上なく幸せを感じてゐるのだという。

「先ほど代わりに一局お相手してきましたからね。心置きなく、ルリをお借りできますよ」

ルリが使いに出ていると知らずに母后陛下の私室を訪ねたクロヴィスは、ちよつと暇を持て余していた彼女のチエスに付き合わされたらしい。

その後母后陛下は、クロヴィスにルリを同行させることを許し、繊細なレースと刺繡が施されたケープを預けた。

クロヴィスが、ルリの帰りを待たずにすぐにでも迎えに行きたいと思つてうずうずしているのを見抜かれてしまつたようだ。

侍女のお仕着せから白いエプロンドレスを取り、その下に着てゐる濃紺のワンピースに華やかで上品なケープを羽織れば、立派な訪問着になる。そうすれば、わざわざ部屋に戻つて着替えをする必要もない。

「せっかくですから、あちらでお茶をご馳走になりましょう」

クロヴィスはそう言つて、ルリの背中にそつと手を回して歩き出した。

クロヴィスとルリが馬車で向かつたのは、グラディアトリアの帝都の北東に建つレイスウェイク大公爵の屋敷である。

当主であるヴィオラント・オル・レイスウェイクは先にも述べた通り、クロヴィスの同腹の兄であり、先の皇帝でもあつた人物だ。

そして、クロヴィスがご機嫌伺いに行くと言つた『義姉上様』とは、ヴィオラントが半年ほど前に妻に迎えたスミレ・ルト・レイスウェイクのことである。

スミレは十八歳のルリよりさらに二つ年下で、大公爵夫人というには随分とあどけない、可憐な少女であつた。

くるくるふわふわの珍しい黒髪と、稀少な紫色の瞳を持つこの美少女は、ルリの母譲りの青い瞳を『瑠璃』っていう名前の宝石みたいで綺麗」といつも褒めてくれる。瑠璃とは、スミレの故郷ではラピスラズリを指す言葉らしい。

彼女はルリがクロヴィスと親しくなるきっかけとなつた人物であり、二人にとつては妹のように可愛い存在でもあつた。

「クロちゃん、ルリさんもいらっしゃい」

ちょうど庭に出ていたスミレは、突然訪ねてきた客人達を満面の笑みで歓迎した。

「何をしているんですか？」

「あのね、セバスチャンがブランコを作つてくれたんだよ」

スミレが嬉しそうに教えてくれた通り、レイスウェイク家の庭の一角に、緑の簾で編まれたブランコが一つ揺れていた。

よくよく見ると、そのブランコは屋敷の壁一面を這う葛の末端にあり、風もないのにゆらゆらと揺れている。

この植物こそが、かの有名なレイスウェイク大公爵家の葛執事セバスチャンである。

動物のように自ら動き、自ら考えるこの不思議な葛は、元々ポトスという植物だったが、植物研究を趣味とするヴィオラントの実験によつて突然変異したものだ。それ以来、急激な生長を遂げ、今ではレイスウェイク家の執事を任せられ、その務めを立派に果たしている。

さらに、このセバスチャンから新芽として分かれ、スミレに“ちびセバス”と名付けられた鉢植えのポトスもまた、現在クロヴィスの執務室で宰相補佐官として働いていたりする。

「クロちゃん、試しに乗つてみてよ」

「はあ、私が？」

葛執事セバスチャンが作った葛のブランコは、漕がずとも勝手に前後に揺ってくれる優れものである。

しかしながら、そんなメルヘンチックな遊具に、とつぐに成人を済ませた宰相閣下はいささか不釣り合い。

スミレは自分で乗せておきながら、ブランコとともに緩慢に揺れる彼を眺め、やれやれと首を振った。

「丈夫なのは分かつたからもう降りていいよ。クロちゃん、ブランコ似合わないね」

「……失敬な」

その後、すぐさまテラスのテーブルが整えられた。そこに焼けたばかりだという大きなシフォンケーキが載ると、大公爵夫人が手すから紅茶を淹れてのティータイムが始まった。

話題は、最近ルリを取り巻く“魔女”と“惚れ薬”的噂について。

「そもそも、惚れ薬というものは実在するのでしょうか？」

ルリがぽつりとこぼした問いに、スミレはうーんと唸りながら口を開いた。

「惚れ薬の材料と言えば、マンドラゴラとか、イモリの黒焼きとか……」

最近ファンタジー風味な読み物にはまっているらしいスミレは、少しばかり魔法と薬に詳しくなっていた。あくまで、空想上のものについてだが。

それを聞いて、紅茶のカップを傾けていたクロヴィスが、うんざりとした顔をして言った。

「マンドラゴラなんて植物は実在しませんし、イモリを食わせるような相手をどうして好きにならなくちゃいけないんですか？」

「でもイモリの黒焼きは、私の知ってる国では本当に薬の材料にされてるらしいよ。媚薬とか強精薬とか」

スミレは元々、グラディアトリアがある世界とは違う、異世界から来た人間だ。



文化や習慣の違いは多々あれど、幸い話し言葉が同じだったことでそれほど不自由はしていない様子。ちなみに彼女の元の世界にも、魔法なんてものは存在しないらしい。

「ふむ……媚薬、ね」

スミレの豆知識を聞いたクロヴィスは、一転ニヤリとすると、隣で紅茶のカップに口を付けていたルリの方を向いた。

「ルリが私に媚薬を盛るとか、ちょっとわくわくしません?」「も、も、盛りませんっ!」

「遠慮せずに、盛つてくれてもいいんですよ? そんなあなたの情熱に、私はもちろん全力でお応えしますとも」

「い、いいえっ……!!」

眼鏡の奥から艶やかな視線を送られた初心なルリは、顔を真っ赤にしてぶんぶんと首を横に振るしかなかつた。

からかい半分、本気半分のクロヴィス。

胸の前で両手を握り合わせておろおろしているルリを見て、スミレは自分の背もたれを振りあおいで口を開いた。

「ヴィー、弟くんが何だか盛大にセクハラを始めたわよ。ちょっと、びしつと説教しといた方がいいんじゃない?」

その背もたれ——銀の髪に妻とお揃いの紫の瞳を持つレイスウェイク大公爵ヴィオラントは、

薄い唇をかすかに笑みの形になると、スミレの黒髪へ愛おしげにキスを落としつつ答えた。

「クロヴィスも毎日仕事に追われて疲れているのだろう。ルリをからかうことで癒されているのだ。このくらいの戯れは大目に見てやろうではないか」

「まつ! お兄ちやまつたら、甘いわ」

「自分が満ち足りている時は、人にも寛容になれるものなのだよ」

その言葉通り、愛妻を膝に抱いたヴィオラントは実に満足げであった。

何しろ、スミレの腹には彼の子が宿っているのだ。先帝陛下は今まさに幸せの絶頂にあつた。

そんな先帝夫妻にひきかえ、クロヴィスとルリは恋人宣言をして三ヶ月ほど経つが、いまだキス止まり。

ルリはともかく、数々の美女と浮き名を流してきたクロヴィスが、そんな清く正しい交際で満足しているのかと疑問に思う者は少なくない。

ただ、彼に近しい者達には、クロヴィスが初心なルリを大切に想い、彼女に歩調を合わせてやつていることがちゃんと分かつていた。

ふと、スミレの椅子代わりになつてているヴィオラントが、柔らかなシフォンのワンピースの上から彼女の腹をそつと撫でた。

それを見ていたルリが、頬を赤くしたまま尋ねる。

「スミレ様、お腹が少しまあるくなられましたか?」「うん、まあね。乙女としては、ちょっと複雑なところだけど……」

妊娠六ヶ月を迎へ、スミレのお腹は膨らみが目立つようになつてきた。元々の体型が華奢だから余計にそう見える。

少し前まではつわりのせいで気分の優れない日が多く、クロヴィスやルリも、病氣ではないと知りつつも心配したものだ。

ようやく安定期に入り、スミレの体調が落ち着いていくにつれ、それまでピリピリしていたヴィオラントも徐々に穏やかさを取り戻していった。

そして、スミレの腹が膨らんでくると、妊娠に実感を持ち始めたのが、レイスウェイク家の葛執事セバスチャンだ。

彼が自らの葛を編んでせつせと作ったブランコは、もちろんこれから生まれてくる御子のためのものだった。気の早い話であるが、セバスチャンもまた赤子の誕生が待ち遠しくて仕方がないのだろう。

「ルリさん、お腹よしよししてあげて」

「まあ、よろしいのですか？」

甘い声で請われたルリは、ドキドキしながらも手を伸ばす。そして「失礼いたします」と断り、そのお腹をそっと撫でた。

この温かな膨らみの中では、今まさに一人の人間が育つているのだ。

まだあどけなさの目立つスミレが母になるのだと聞いた時の衝撃は、正直今も尾を引いているが、とはいえるルリもまた赤子の誕生を楽しみにしていた。

「やや様には、私の声も聞こえているのでしょうか？」

「うん、きっと聞こえてるよ。ルリさんの声は胎教に良さそう」

年が近くて優しいルリを、スミレは姉のように慕つてゐる。

猫をかぶるのが上手なスミレは誰とでも大体うまく付き合えるが、実は夫ヴィオラントと同様にかなり排他的なところがあり、そして結構な面倒くさがり屋だ。

しかしその一方で、一度心許した者のためなら苦労を惜しまない、情が深い一面もある。

以前、ルリが父ワインセット侯爵の孫にあたる男に逆恨みされ、城の外れの小屋に連れ込まれた時などは、危険も厭わず飛び込んで助けてくれたのだ。

その際、床に押し倒されていたルリは、スミレが男に見舞つた華麗な跳び蹴りをはつきりと見ることはできなかつたのだが、よくよく思い返してみれば、あの時すでにスミレのお腹には赤子が宿つていたはずだ。逆上した男とその仲間達が彼女に乱暴する前に、クロヴィスとヴィオラントが駆け付けてくれて本当によかつた。

いろいろな思いを込めて、ルリは愛おしげにスミレの腹を撫でた。

「この子にはルリさんのことを『お姉様』って呼ばせるからね」

そう微笑むスミレの言葉に、ルリは舌足らずな幼子が自分を『お姉様』と呼んで甘えてくる様を想像する。そしてゆるゆるに緩んで蕩けそうになる頬を思わず両手で押さえた。

そんな彼女の様子を微笑ましく思いながら、「では」とクロヴィスも口を挟む。

「私のことは何ど?」

「クロちゃんは、『おじちゃん』に決まつてゐるじゃん」

「うーむ……間違ひではないですが、何か腑に落ちないというか。ルリと比べて随分扱いがぞんざいではないですか？」

「『腹黒宰相閣下』でもいいよ。言いくらいから、おしゃべり上手になるまで待つてあげてね」

「……『おじちゃん』で、手を打ちましょう……」

泣く子も黙ると恐れられる宰相閣下も、相変わらずちつちつな義姉あねうえには敵うえがない。スミレにやり込められて、苦虫を噛み潰したような顔で妥協したクロヴィスに、ルリは堪こらえ切れずくすくすと笑つた。

そんな和やかなお茶会では、いただくお菓子もまた格別。今日のメインは、スミレお手製の背の高いシフォンケーキだ。

その少し茶色味がかつたスポンジを一口食べたとたん、ルリは初めて体験する味に青い目をぱちくりさせる。

「スミレ様、とても美味しいです。今日のシフォンケーキには何が入っているのですか？」

「コーヒーフードの単語に、きよとんとして首を傾げた。

コーヒーとは、スミレの故郷である異世界において最も多くの地域で愛飲されている飲料だが、グラデイアトリアやその周辺諸国には存在しない。

「こひー、ですか？」

ルリは聞いたことのない単語に、きよとんとして首を傾げた。

「コーヒーフードの単語に、きよとんとして首を傾げた。

こちらで嗜好飲料しそういんりょうといえば、主に紅茶とアルコールの二種類である。
「香ばしくて、少し苦味があつて……不思議な風味ふしきぎがしますね」
「木の実の種を焙煎ほいせんして粉にして、湯を注いで抽出ちゅうとうしたものなんだよ。そのまま飲んでもミルクを入れても美味しいんだけど、こっちの人達には馴染みがないだろうから、まずはお菓子に混ぜてみたの」

ただしスミレが混ぜたのは、手軽に飲めるように加工されたインスタントコーヒーである。

「原料の実は、『コーヒー豆』って呼ばれてるから、コーヒーは簡単に言うと豆の煮汁」

「豆といえば……あれも美味しいですよね。アズキって言いましたつけ？」

「クロちゃん、さすがツウだねえ」

泣く子も黙る宰相閣下は、実はお茶菓子にはちよつとうるさいのだ。

元々甘いものは好きな方だったが、ルリと出会つて改めてその魅力に気づいたらしく、最近では彼女に付き合つて厨房ちゅうしょに立つこともあるのだとか。

「そのコーヒーというのを、次は飲み物として賞味させてください」「いーよ」

今日のスミレのおもてなし、コーヒーのシフォンケーキも彼の口に合つたようだ。

ケーキ 자체は随分と甘さ控えめだが、添えられたホイップクリームが甘い。

ケーキ単体でコーヒーのほろ苦さを楽しむのもよし、クリームを絡めてカフェオレのようにマイルドな甘さを楽しむのもよし。

「ヴィーも美味しい？」

「ああ」

シフォンケーキが甘くないのは何を隠そう、ヴィオラントが食べることを前提に作られているからだ。

彼が甘いものを極端に苦手としているのは有名な話で、実の弟であるクロヴィスでさえ、スミレが来るまで、ヴィオラントがそういった類いのものを口にする姿を見たことがなかったのだ。だから、胸焼けするほど甘い視線で愛妻を見下ろし、彼女の差し出すケーキを口に迎え入れる兄の姿を見せられた時、クロヴィスは一種の感動を覚えたものだ。

ヴィオラントにはスミレが、スミレにはヴィオラントが。

世界を越え、数多の奇跡によって結ばれた二人にとって、もはや他のパートナーなど考えられない。

「ああ、もう。相変わらず当てられちゃいますね」

クロヴィスはルリにそう囁き、眼鏡の奥で目を細めた。
ルリも仲睦^{なかむつ}まじいレイスウェイク大公爵夫妻の様子に頬を赤らめつつ、乙女らしく幸せな結婚生活へと憧れを募らせるのだった。

「——ねえ、ちょっと……」

「はい？」

レイスウェイク大公爵家を訪ねた翌日の午後、ルリは前日と同じ場所で、同じ声に呼び止められた。

驚いてきよろきよろと辺りを見回してみると、廊下の大きな柱の陰からおずおずと現れたのは、やはり昨日ルリに声をかけてきた貴族の令嬢だった。

昨日はお付きの侍女を連れていたが、今日は彼女一人きりだ。

「まあ、お嬢様。いかがなさいましたか？」

ルリが優しい声で尋ねると、幼げな令嬢はもじもじしながら、まず最初に「私はコルチネット侯爵家の長女アンナと言うの」と名乗った。

まだ十四歳になつたばかりというこの初々しい淑女が、涙を滲ませて語つたところによると、彼女は昨日のルリのアドバイス通り、自分の手でお菓子を作つて意中の男性にプレゼントしようと考えたらしい。

しかし、屋敷に帰つてそれを母親であるコルチネット侯爵夫人に話したら、大反対にあつたというのだ。

「侯爵家の娘が厨房^{どふうぼう}に入る必要などない。お菓子をプレゼントしたければ、料理人が作ったものを手作りだと言つて渡せばいいと……」

「まあ……」

悲しそうに眉を八の字にした少女を見てルリの胸も痛んだが、アンナは愚痴^ちを聞いてもらいたくてルリのもとにやつてきたわけではなかつた。

アンナは涙の滲んだはしばみ色の瞳でルリを見上げ、突然「あなたにお願いがあるの」と言つた。「お菓子の作り方を、教えてもらえないかしら？」

「え？」

「私、やっぱりちゃんと自分で作ったものをお渡ししたいの。だつてそういうじゃないと、あの方に想
いが通じなかつた時、お菓子を作つた料理人のせいにしてしまひそうで嫌なんですもの」

「お嬢様……」

その言葉に胸を打たれたルリは、出来る限り協力してあげたいと思つた。

幸いルリもこれから、すっかり馴染みとなつた厨房に向かうところだつた。

本日母后陛下ほこうへいかは、長年の親友でもある侍女頭じじょがしらと一緒に連れ立つて、街の劇場へと観劇に出かけている。

帰りは夕刻になる予定で、留守番の侍女達にはそれまで自由時間が与えられていた。

さらには、最近随分と親しくなつた料理長から、隣の農業大国コンラート産の最高級クリームチー

ズが届いたから、少し分けてやるとの知らせがあつたばかり。

「アンナ様。よろしければ、これから一緒にお菓子を作つてみませんか？」

「まあ、いいの？」

とたんにアンナは嬉しそうに顔を輝かせる。そんな彼女の反応にルリもにつこりと微笑み、そのまま厨房へと案内した。

ルリがいつもお世話になつているのは、グラディアトリア城にいくつかある厨房の中でも要かなめと言
える大きな厨房で、皇帝陛下や母后陛下、その他宰相さいしょうをはじめとする要人達の食事を作る場である。
今は屋餉ひやげの片付けがようやく落ち着き、いつもは忙しい厨房も幾分のんびりしていた。

ルリに連れられ初めてそこに足を踏み入れたアンナは、辺りを見渡し、ほう、とため息を一つつ

いた。

「すごく、たくさん的人が働いているのね……」

「そうですね。ここにいる一人一人が、美味しい料理を生み出す魔法の手を持つているのですよ」

「まあ、素敵」

そう言つて微笑んだアンナは、続いてあちらこちらに食材や食器が山積みになつて雑然どしてい
る様子を見て圧倒されたようだつた。

衛生的に問題はないのだが、使用人がきれいで整理整頓した部屋しか知らない令嬢にとつては
見慣れない光景なのだろう。だが、やがて焼き窯やかまから漏れるパンの焼ける匂いにすんと鼻を鳴らし、
また顔を綻ほころばせた。

「とてもいい匂いがするわ」

そんな彼女に、ルリは厨房の奥からやつてきた料理長を紹介した。

料理長は、顎あに白いひげをたくわえた壯年の男性で、ルリも初めの頃は、無口で強面こわくての彼を前に
すると緊張して仕方がなかつた。

しかし彼が、仕事には厳しいが人情に厚く、部下の料理人達にもたいそう慕われている人物であ
ると知つてからは、だんだんと落ち着いて言葉を交わせるようになつていつた。

料理長はルリから厨房を使いたいと聞くと、場違いなドレス姿のアンナにちらりと視線をやる。
しかし特に何も尋ねることなく、約束のクリームチーズを分けてやると言つて、また奥へと引っ込
んで行つてしまつた。

「急に押し掛けたので、怒つていらっしゃるのかしら……」

無愛想なその様子に、アンナはひどく不安そうな顔をしてルリに尋ねてくる。

昨日初めて言葉を交わした時には、少なからず気位が高く見えたものだが、今日の彼女はそうでもない。もしかしたらお付きの侍女の手前、高慢な態度をとつていただけで、実際はずつと穏やかな性格なのかもしれない。

「大丈夫ですよ。怒つているのなら、出て行けと容赦なくおっしゃる方ですから」

「そう……？」

宥めるルリの言葉を聞いても、アンナはまだ少し不安そうだった。

そんな彼女の前に、戻ってきた料理長があるものを差し出した。

「その高級そうな服が汚れてはいけない。これを着てやりなさい」

「あ……」

それは、ルリ達侍女が身につけているのと同じような、真っ白いエプロンドレスだった。

ルリがわざわざ令嬢を連れてきたことから事情を察したのだろう。どうやら料理長は、自ら奥の更衣室までそれを取りに行つてくれたらしい。

ぱさりと投げるように渡されたエプロンドレスにアンナが戸惑っている間に、料理長はルリにクリームチーズを渡し、仕事があると言つてまたさつさと奥へと戻つていった。

「ありがとうございます、料理長」

ルリはアンナに代わつてその背に礼を言うのだった。

さてさて、アンナはレースとフリルの可愛いドレスの上に、料理長が貸してくれたシンプルなエプロンドレスを着込んで準備万端。

間借りした調理台の上には、小麦粉に砂糖に卵、ミルク、バター、そして分けてもらつた高級クリームチーズ。

ルリはそこに、アールグレイの紅茶葉を加えた。

「生地にクリームチーズと紅茶を混ぜたケーキにしようと思うのですが……お相手の方は、どのような男性ですか？」

「年上の……騎士団に所属していらっしゃる方よ」

意中の男性を思い浮かべたとたん、アンナは両の頬を真っ赤に染める。

「では、手軽に召し上がっていただけるように、小さなカップに入れて焼きましょうか。甘さは、少し控えめで……」

ルリはそんなアンナに微笑みながら、混ぜる材料の分量を考えた。

厨房に入るのも初めて、料理をするのも初めてのアンナは、もちろん卵を割るのだって初めてだ。力み過ぎて一個目の卵を駄目にしてしまったのは、初めて母と厨房に立つた時のルリと同じ。

その時母が自分にしてくれたように、ルリは背後からアンナの手に両手を添えて、一緒に二つ目の卵を割つてやつた。

カパリという軽快な音とともに、白い殻からまるひでた白身と黄身が、綺麗に円を描いてボウル

の底に留まつた。

それだけで、アンナの顔がぱっと輝く。

続けて三つ目の卵に挑戦した彼女は、今度は一人で立派に割つてみせ、「やつた！ できたわ！」と嬉しそうに振り返つた。

笑顔で頷いたルリは次に、その卵をアンナに泡立て器で搔き混ぜさせる。

その隙に、紅茶の葉に熱湯をかけ、蒸らしておく。

続いて、二人で協力して新しいボウルでバターと砂糖を混ぜ合わせ、さらにクリームチーズを加えてしつかりと混ぜた。

そこに先ほど割りほぐした卵を少しずつ入れていき、紅茶葉、小麦粉、ミルクを順に加え、ざつくりと混ぜる。

両手とエプロンを粉だらけにしながらも、アンナはルリの指示に素直に従い、一生懸命お菓子作りに取り組んだ。

最後に生地を小さなカップの型に入れる。

あとは窯で焼き上がるのを待つだけだ。

熱い窯の中を覗き込み、少しづつケーキが膨らんでいく様をわくわくしながら眺めるアンナに、ルリは微笑みながら「お顔も一緒に焼けてしますよ」と注意した。

慌てて窯から顔を離したアンナが、鼻の頭に滲んだ汗を片手で拭うと、手についていた粉が鼻の頭を白くしてしまう。

ルリは、幼い頃の自分がまつたく同じことをしたのを思い出し、やはりその時母がしてくれたよう、懐から取り出したハンカチで少女の可愛らしい鼻の頭を拭つてやつた。

そんなルリとアンナに、仕事が一段落した料理人の一人が紅茶を淹れてくれた。

ミルクに紅茶葉を入れて鍋で沸かし、そこにハチミツを加えて漉した、甘くて濃厚なロイヤルミ

ルクティー。

二人は厨房の端の小さな椅子に並んで腰掛け、それをはふはふしながら飲む。そうしてケーキが焼き上がるのを待つた。

ところが、そんなほのぼのとした雰囲気を打ち壊すように、突然厨房の扉がバンと開かれた。

そして、一人の女性がすかすかと中へと踏み込んでくる。その女性はアンナを見つけると叫んだ。

「——アンナ！ こんなところで何をしているの！」

「お、お母様っ……！」

やつてきたのは、アンナの母親であるコルチネット侯爵夫人だった。

アンナはこの日、騎士團に属している兄に会うため、母とともに王城にやつてきたのだという。

王城の敷地内の寄宿舎で寝泊まりする兄を近くのサロンに呼び出して、熱心に見合いを勧め始めた母に、アンナは少し庭を見てくると断つてルリのもとまでやつてきたらしい。

あまりに帰りが遅い娘を心配し、王城内を探し回つていたコルチネット侯爵夫人に、たまたま近くにいた護衛騎士が、侍女と一緒に厨房へ入つて行つたと教えたのだ。

「侯爵家の娘どもあろうものが、このような使用人の場所に足を踏み入れるなど、何を考えている

の！」

コルチネット侯爵夫人は、何ごとかと目を丸くしている料理人達を睨みつけ、そう喚き散らした。

当然、厨房内の雰囲気は一気に悪くなる。

先帝陛下の改革により、無闇やたらと威張り散らす貴族は随分と少なくなつたが、それでもまだこのコルチネット侯爵夫人のように選民意識を捨てられない者がいるのだ。

「おおいやだつ！ 焦げの臭いがドレスに付くではありませんか！」

アンナにとつては芳しいパンの焼ける匂いも、母にとつては焦げと雑多な食べ物の臭いでしかないようだ。

あからさまに顔をしかめた母親に、アンナが泣きそうな顔をする。それに気づいたルリは、慌てて間に入ろうと口を開いた。

「お許しください、奥様。アンナ様はとても一生懸命でいらして……」

「お黙り！ 侍女風情が、気安く口をきくでないわっ！」

コルチネット侯爵夫人はヒステリックに叫んでルリを睨み、アンナの腕を乱暴に掴んだ。

「さつさと来なさい！ いつまでこんな場所にいるつもりなの！」

「で、でもっ……今、ケーキを焼いているところで……！」

「まあ、母に口答えするなど……！」

カツとなつた侯爵夫人は、いきなり片手を振り上げた。娘を平手でぶつつもりなのだ。

これが初めてではないのか、アンナは母の手を避けようともせず、ぎゅっと両目を瞑つて耐えようとした。

しかし、侯爵夫人の手が振り下ろされることにはなかつた。

「——おやめなさい、コルチネット侯爵夫人」

いつの間に厨房に入ってきたのか、侯爵夫人の手首を後ろから掴んだ者がいたのだ。

コルチネット侯爵夫人ははつとして背後を振り返る。そして自分の手首を掴んでいる者の正体に気づいたとたん、一気に青ざめた。

「大事なお嬢さんを母親がぶつてどうします。そんなもの、駄目でもなんでもありませんよ」「ク、クロヴィス様！」

コルチネット侯爵夫人の平手を止めたのは、クロヴィスだつた。

彼は、ほつとするルリに小さく微笑むと、かたかたと震え出した侯爵夫人の手首を解放した。そんな中、料理長が相変わらずの無愛想な声で、

「……焼けましたぞ」

と告げた。そして窓から焼きたてのカッピーケーキを取り出す。

クロヴィスは侯爵夫人の脇を通つて窓の前まで行き、料理長の隣に並んで、焼けたケーキを見下ろした。

そして顎に片手をあてて、「ふむ」と呟く。

「何だかすごく美味しそうなんですが……これは誰が作つたんですか？」

その問いに、すかさず答えたのはルリだ。

「こちらのアンナ様です。初めてでいらっしゃるのに、とても上手にできましたね」

「ほう、そうですか。では、アンナ嬢。これはどなたに一番に食べてもらいたいですか？」

それは、アンナが想い人にプレゼントするため作つたお菓子だ。

しかし、クロヴィスに問われて彼女が一番に思い浮かべたのは、意外にもまったく別の人顔だつた。

「これは、お母様に！　お母様に、食べていただきたいです！」

「まあ、アンナ……」

「黙つて勝手なことをして、申し訳ありませんでした。でも、こちらのルリさんと料理長さん達にお世話になつて、とても楽しくお菓子を作ることができました。アンナの初めて作つたこのお菓子は、お母様に食べていただきたいです」

いじらしいアンナの言葉に感動しているルリの傍らで、料理長は黙つてカツッペケーキを箱に詰めた。そして、それをアンナに持たせてやり、代わりに粉で汚れたエプロンを受け取る。

コルチネット侯爵夫人は最初の威勢はどこへやら、ひどく戸惑つた様子で側にやつてきた娘を見下ろした。

そんな彼女にクロヴィスはちくりと釘を刺す。

「あなたが口をきくなと怒鳴りつけた侍女は、私の大切な女性なんですよ」「も、申しわけ……」

「いえ、私に言われてもね——ルリ、怒つてますか？」

「い、いいえっ！」

口調は穏やかながらクロヴィスの目が笑つていないので氣づいて、ルリは慌てて答えた。

「ふむ、ではコルチネット侯爵夫人。あなたの無礼をとやかく言うのはやめましょう。その代わり……」

気の毒なほど真っ青になつたコルチネット侯爵夫人の右手は、震えつつもしっかりとアンナの手を握っている。それを見て、その手が再び娘に振り上げられることはないと知つたクロヴィスは、目を細めて言った。

「娘さんを、怒らないでやつてくださいね。それから、彼女の願い通り、一番にケーキを食べて差し上げてくださいよ」

「は、はい……」

「我が子に手作りお菓子をご馳走してもらえるような貴族は、なかなかいませんよ。あなたは娘さんを自慢すべきです」

「閣下……」

侯爵夫人はまだ青い顔をしていたが、アンナはクロヴィスの気遣いに感謝して、ぺこりと頭を下げた。

さらに、料理長とその背後で見守る料理人達に向かつて、今度はきちんと自分で「ありがとうございました」とお礼を言った。

そして……

「ルリさん、どうもありがとうございます。私、今度は一人で作ってみるわ。分からなくなつたら、また教わりに来てもいいかしら?」

「はい、もちろんです。いつでも、お待ちしております」

ルリの言葉に嬉しそうに微笑んだ侯爵令嬢の、愛らしいことといったら。

こんな笑顔で手作りお菓子を差し出されたら、アンナが慕う騎士だつてきっとイチコロに違いない。

母と連れ立つて去っていく少女の背中を見送りながら、ルリは彼女の恋がどうかうまくいきますようにと祈つた。

そうして、二人の姿が扉の向こうへ消えると、ルリは改めて厨房ちゅうろうの中に向き直り、そこに居合わせた人々に頭を下げた。

「皆さん。私の勝手な行動でお騒がせしてしまい、申し訳ありませんでした」

もちろん、彼女を責める者など一人もいない。

皆、やれやれ一件落着と苦笑して、それぞれの持ち場に戻つて行つた。

「クロヴィス様にも、お手数をおかけしました」

「いや何、ルリの魔法の信者であるあのお嬢さんは、昨日もお見かけしましたからね。これも何かの縁です。今日は、何やら弟子に昇格していただようですが?」

「弟子だなんて……。でも、私も初めてお菓子を作つた時のことを思い出しながらお教えしたので、

とても懐かしかつたです」

にこりと幸せそうに微笑むルリに、クロヴィスも柔らかい笑みを返す。

そんな彼の片手には、実はこの厨房に現れた時から一枚の紙が握られていた。ルリはそれに視線を落とし、首を傾げて問うた。

「ところで、クロヴィス様はどうしてこちらに?」

「ああ、そうでした。うつかりここに来た用件を忘れるところでした」

クロヴィスはそう言つて紙を広げると、自分の隣に立つていた人物に突き付けた。

「ちょっと、料理長。財務省から届いたこの請求書の件で、話があります」

「……何ですか、閣下」

「何ですか、じゃないですよ。あなた、私の名前で勝手に高級クリームチーズを仕入れましたね」「宰相閣下ともある方が、チーズの一つや二つでとやかくおっしゃいますな。たくさん稼いでいらっしゃるでしよう」

「そういう問題ではありませんよ」

ルリはクロヴィスがビシリツと指で弾いた請求書を覗き込むと、次の瞬間、腰を抜かしそうになつた。

ルリがいつも使つているクリームチーズ——それも一般のものよりはるかに高価な皇室御用達の品——が、優に三十個は買えるような値段だつた。

「りよ、料理長。もしかして、さっきアンナ様とカップケーキに使つたクリームチーズが……」

「最高級品というだけあって、絶妙な滑らかさと風味であつたろう?」

「あわわわ……も、申し訳ありません! クロヴィス様……!」

知らなかつたとはいえ、遠慮なくたつぱり使つてしまつたとルリが涙目で謝ると、クロヴィスはやれやれとため息をついて彼女の肩を抱き寄せた。

それを見ていた料理長が、白い頬ひげを撫でながら「しかたない」と口を開いた。

「わしが後でこつそり食べるため取つておいた分を譲るから、ルリはそれで何か作つて閣下を黙らせてくれ」

「こつそりつて何ですか。クリームチーズ横領ですよ」

実はこの料理長、クロヴィスはもちろん、その兄ヴィオラントが幼い頃からこの厨房を取り仕切つていた人物。彼ら兄弟の食事を作り続け、さらに先帝ヴィオラントが統治した波乱の時代には、隙あらば食事に毒を仕込もうとする不届き者を蹴散らして、皇帝やそれを支える者達の食卓を守つてきた。爵位も持たぬ男であるが、間違いなくグラディアトリアの重鎮と言える。

料理長は、不満げな顔のクロヴィスに向かつてふつと一瞬表情を和らげると、後ろにいた料理人の一人に命じた。

「おい、閣下にもミルクティーをお出ししろ。イライラが溜まつていらつしやるようだから、ハチミツをたっぷり入れて甘くしてな」

「誰のせいでイライラしていると思つてるんですか」

ますます不満を露わにするクロヴィスに、ルリは堪らずふつと噴き出した。

それを見咎めた彼に「こら」と叱られたが、その声は優しくてちつとも怖くない。

「こうなつたら料理長の言うように、ルリがお菓子を作つて私を黙らせてごらんなさい」「まあ、どうしましょう。責任重大です」

困つた風を装いながらも嬉しそうに言うルリに、料理長は一言短く「お前さんならできる」と太鼓判を押した。

「その口紅の色、少しきつすぎるんじゃないかな？」

「あら、このぐらいはつきりした方が、大人っぽくなるのではなくて？」

「でもこっちのアプリコット色も捨てがたいわ」

華やかなドレスや宝石が並ぶ部屋で、うきうきとした侍女達が口々にさえずっている。

結局意見がまとまらなかつた彼女達は、近くで見守る主人に指示をあおぐことにした。

「母后様、どの色にいたしましょう？」

「まあ、そうねえ……」

それまで侍女達の様子を楽しそうに眺めていたこの部屋の主、母后エリザベス・フィア・グラデイアトリアは、につこりと微笑んで首を傾げた。

彼女の視線の先には、姉侍女に囲まれて、困ったような顔をしているルリがいる。

彼女は今、母后陛下の指示のもと、ドレスアップの真っ最中である。

本日は、現皇帝ルドヴィーケの生母である母后エリザベスの誕生日。

毎年この日には、男爵以上の貴族と、母后陛下と特に親しい者達を集めてパーティが催される。ルリも前年までは給仕として会場に赴いていたのだが、今年は宰相クロヴィスの恋人、つまりパー

トナーとして参加することになった。

皇族のクロヴィスが立つのは母后陛下のすぐ側——つまり上座かみざである。

そんな場所になど縁のなかつたルリは、当然恐れ多くて無理ですと涙目で訴えたが、母后陛下にどうしてもとお願いされてしまったのだ。

「だって、アマリアスもミリアニスも出席できなくて寂しいじゃない。せめてルリは、わたくしの側にいてちようだいな」

敬愛する母后陛下にお願いされると、ルリはそれ以上固辞することはできない。

それに双子の皇女アマリアスとミリアニスは現在、揃つて臨月を迎えており、母后陛下も大事をとつて今日のパーティには出席させていない。グラディアトリアの双珠ふくじゅと呼ばれた美しい皇女達の代わりなど、自分では到底務まらないが、せつかくの誕生日パーティで母后陛下が寂しい想いをするのも嫌だつた。

幸いにして、この日はルリにとつて心強い味方が同席することになつていた。

「——わっ！ ルリさん、きれー！」

花のような笑顔とともに現れたのは、久しぶりに王城を訪れたレイスウェイク大公爵夫人スミレだつた。

妊娠六ヶ月のぽっこりと膨らんだお腹は、胸元で切り替えるあるふんわりとしたシフォンドレスで誤魔化され、あまり目立たない。

ピンク色をベースとしたこのドレスには、繊細なレースとフリルがふんだんに施され、ところ

どころに飾られた花はスミレの瞳と同じ紫色。くるくるふわふわの黒髪にも同じ色の花が飾られて、まさに精巧な人形のような愛らしさだった。

そんな彼女の後ろから悠然と歩を進めてきたのは、夫であるレイスウェイク大公爵ヴィオラント。その絶世の美貌は玉座を退いた今も衰えを知らず、それどころかあどけない妻を得てからはますます輝くばかりだった。

母后陛下^{ぼこうへいか}はそんな二人につこりと微笑むと、ルリのもとに飛んでいったスミレに向かつて尋ねた。

「スミレ。ルリの口紅の色、どれがいいと思います?」

「アプリコット! アプリコット一択で!」

スミレの即答に、元々アプリコット色を推していた侍女が「さすが、スミレ様!」と顔を輝かせた。この日ルリが着せられたのは、青に近いミントグリーンをベースにしたプリンセスラインのドレス。

花の形に編まれたレースと、これまたアプリコットを薄めたような色の小花をちりばめた可憐なスタイル。

母后陛下が前々からルリのためにオーダーしていたといこのドレスは、本日ようやくお披露目の機会を得たのだった。

長いドレスの裾^{すそ}で隠れる足元は、小花と同じ薄いアプリコット色のローパンプス。

最初用意されていた高いヒール靴は、試着したルリの足取りがふらふらと危なつかしい様子だつ

たので却下された。

いつも結っている栗色の髪は下ろされ、姉侍女達^{しよじめ}が丁寧に巻いて毛先だけくくるりとカールさせてくれた。それを緩^{ゆる}いハーフアップにし、結び目に華やかな生花を飾る。

いつも自分でしているより入念に化粧を施され、最後は唇に、小さな筆でアプリコット色の口紅が丁寧に載せられた。

支度が終わったルリを眺め、スミレがほうつと感嘆のため息をついた。

「ルリさん、きれい。お姫様みたい」

「そ、そんな……スミレ様こそ、ドール・クリスティーナのようで素敵です!」

ドール・クリスティーナとはグラディアトリアの貴婦人達の間で絶大な人気を誇る愛玩^{あいがんにんぎょう}人形で、スミレがそれにそつくりだというのは有名な話だった。

手を取り合つて互いを褒め合い、微笑みを交わす少女達は実に可憐で、それを見守る母后陛下とヴィオラントはともに目を細めた。

そこにちようど、正装したクロヴィスがルドヴィーケと連れ立つてやってきた。

「やや、腹黒王子がお姫様を攫^{くさら}いに來た!」

「攫いにじやなくて、迎えに來たんですよ」

「腹黒は否定しないんだ?」

「否定したら、私に対する認識を改めてくれるんですか?」

「改めませんけど」

まずはいつものようにスミレと戯れたクロヴィスは、その視線をルリへと向けた。

この日の主役である母后陛下をエスコートするのは、実の息子である皇帝ルドヴィーグ。スミレをエスコートするのは、もちろん夫であるヴィオラント。

そして、慣れないドレスを着て戸惑うばかりのルリの手を取るのは、クロヴィスだった。

「やあ、これは美しい……どうしましょう、緊張で手が震えてしまいします」

「え？」

そう言うクロヴィスの手は、実際には震えてなどいない。それどころか力強くルリの手を握り締め、ぐっと引っ張つてその身体を自分のもとへと引き寄せた。

「クロヴィス様……嘘つきです。全然緊張なんてなさっていらないのに」

「おや、それは心外な。信じられないと言うのなら、この胸に耳を当てて確かめてごらんなさい」

そう言って、クロヴィスはそっとルリの頭を抱き寄せ、自分の胸元に押し当てる。母后陛下達のいる前なので少し恥ずかしかったが、ふわりと鼻腔をくすぐる彼の香りが心地よく、ルリはされるままに身を委ねてみた。

トクトクトク……と、一定のリズムで刻まれる心音が、優しくルリの鼓膜を打つ。

それは緩やかで力強い音だった。

やはりクロヴィスが緊張しているなどというのは嘘だった。

けれど、その温かな胸に寄り添い心音に耳を澄ましていううちに、がちがちに緊張していた身体がゆっくりとほぐれていくような気がした。

ルリがほつと肩の力を抜くのを見届けた母后陛下は、彼女をクロヴィスに任せ、今度はスミレに向かつて手招きをした。

「スミレ、こちらにいらっしゃい。ばあばにお腹の子への挨拶をさせてちょうだい」

「ばあばって……そんな呼び方、母后様には似合わないなあ」

「だって、孫ができるから、ばあばに違ひないでしょ？」

母后陛下はそう言うと、側にやってきたスミレの腹をシフォンドレスの上から優しく撫^{なな}でる。そして「早く会いたいわ」と囁いた。

それを黙つて見守るヴィオラントの表情は柔らかく、ルリや彼の弟達もふわりと心が温まるのを感じた。

その後、母后陛下にスミレとヴィオラントが贈った誕生日プレゼントは、緻細な細工に職人の技が光るクリスタルの花瓶。以前夫婦で街を散策した時に偶然見つけた裏路地のアトリエで、ヴィオラント自ら頼み込んで作つてもらった逸品だ。

二人はその花瓶の中に、自分達が屋敷の庭で育てた花々の中から、この朝特別綺麗に開いたものを生けて手渡した。

息子夫婦の気持ちがこもったプレゼントを、母后陛下はこのままパーティ会場で自分の側に飾ると言つて喜んだ。

少し前なら、スミレはおそらく手作りのお菓子をプレゼントしていただろう。しかし、今回はあるてそれを避けたことで、その役目をルリに譲つた形となつた。

スミレの予想通り、ルリは朝摘んだばかりの熟したベリーをふんだんに載せたバースデーケーキを焼いた。

料理長の計らいで、それはこの後のパーテイで母后陛下^{ぼこうへいか}の前に出されることになっている。

しかもそのケーキには、先日料理長がクロヴィスの名義で勝手に仕入れた最高級クリームチーズが使われている。

もちろん、スポンサーであるクロヴィスの許可もちゃんと取得済みだ。

「母后様、お誕生日おめでとう」

「まあ、ありがとう」

スミレは明るい声で祝いの言葉を述べると、母后陛下の頬にそっと唇を寄せた。

それはまるで、天使が女神にキスを贈っているような美しい光景だった。

ルリは思わず、ほうつ……と感嘆のため息をつく。

ところが、次の瞬間。

スミレが笑顔で続けた言葉に、ルリの表情はその場の空気とともにぴしりと固まつた。

「で、ばあば——今日でいくつになつたの？」

「まあ、スミレったら。うふふ……」

日も暮れかけ、続々と到着する馬車で王城の正面玄関が賑やかになつてきた頃、ルリは母后陛下とともにパーテイ会場である大広間へと移動した。

可愛い妹分の社交界デビューとあつて、控えの間で待機する姉侍女達もそわそわと落ち着かない。「ルリ、しつかり！ 下を向いていては駄目よ！」

「とにかく、笑顔よ！ 何か分からなきことがあつても笑つて誤魔化すのよ！」

「お酒の飲み過ぎは失敗のもとよ！ 誰かに勧められてもほどほどにね！」

などなど、一生懸命ルリに言い聞かせていた侍女達は、最後に一斉にクロヴィスの方を向くと、声を揃えて言つた。

「クロヴィス様！ ルリをよろしくお願ひいたしますっ！」

「はいはい、承知いたしましたよ、お姉様方。ルリは責任を持つてお預かりしますから、ご安心くださいませ」

クロヴィスはそう言つて苦笑すると、纖細なレースの袖に守られたルリの肩を抱き、控えの間から大広間へと連れ出した。

すでにそこには大勢の客が到着しており、上座^{かみざ}に並んで座る母后エリザベスと皇帝ルドヴィーアの周りにも名立たる貴族達が集まっていた。

同じく一足先に大広間に入ったスミレも、ヴィオラントと並んで上座のすぐ脇に用意されたふかふかのソファに座っている。

「もしもーし。聞こえるかーい？ じいじだよ～」

その腹を、ソファの前に両膝をついてデレデレと撫^なでているのは、母后陛下の実の兄であるヒルディベル・フィア・シユタニアーハ爵。

その背後で「まあまあ」と苦笑しているのが、夫人のイメリア・ルト・シュタイアードだ。

シュタイアー公爵夫妻はスミレと正式に養子縁組をしており、さらには彼女を実の娘のように溺愛している。

そのシュタイアー公爵だが、実はルリの父であるワインセット侯爵が処刑された当時の宰相であり、処刑後、残されたルリと母が王城に住まうことに反対した人物でもあつた。それは当時の情勢を考えれば仕方のないことだつたが、それでも彼は最終的にはルリ達母子を引き取りたいとの母后陛下の懇願を聞き入れ、二人が一緒に王城に住めるように手配してくれた。

ルリは母后陛下のみならず、彼にも大きな恩を感じている。

そんなルリを連れ、クロヴィスはかつて次期宰相として教えを請うた師に対し、呆れたように声をかけた。

「もう少し顔を引き締められてはいかがですか？」公爵の威厳をどこに置き忘れてきたのですか

「威厳とは普段は表に出さずにしまつておいて、ここぞという時に引っ張り出してくるものなのですよ、クロヴィス君」

シュタイアー公爵はスミレの腹を撫でながら、クロヴィスに向かつてにやりと笑つた。

それからすぐにその笑みを優しいものへと変え、ルリを見た。

「やあ、ルリ。久しぶりだね」

「ご無沙汰いたしております、ヒルディベル様」

ルリは慌ててドレスを摘み、ぎくしゃくと慣れない礼をした。

その初々しい様子を優しく見守りながら、シュタイアー公爵はクロヴィスにまたニヤニヤ笑いを向ける。

それに対し、クロヴィスは胡乱な目をして言葉を返した。

「何かおっしゃりたいことでも？」

「いや何。君こそ、可愛い恋人をエスコートして浮かれてるんじゃないかと思つてね」「いけませんか」

「まさか。むしろ喜ばしいことだよ。ねえ？」スミレ

シュタイアー公爵は笑みを浮かべたまま、傍らの養女スミレに声をかけた。

スミレは「うん」と頷いたものの、なおも自分の腹を撫でてくる養父に、うんざりとした様子で抗議した。

「なでなで、しつこいよ」

「だつて初孫だよっ！」君のこのぱっこりお腹の中には、うちの初孫が入つてるんだよっ！」

そう力説したシュタイアー公爵は、呆れる周囲の視線も気にせず、さらにデレデレとスミレの腹を撫で回そうとした。

だが、いい加減機嫌を損ねた彼女にビシリッと手の甲を叩かれてしまう。

「乙女の腹に向かつて、ぽつこりぽつこりと……デリカシーのないダディなんて、キライ」

「ス、スミレー!? ダディが悪かつたよ！ 怒らないでえつ……!!」

とたんにスミレのご機嫌を取ろうと必死になるシュタイアー公爵。

そんな彼に、ヴィオラントは妻の肩を抱きながら呆れたような視線を向け、その隣のルドヴィーケは思わずといった様子で苦笑する。

そのルドヴィーケの背後でにこにこしているのは、皇帝の第一騎士であるオルセオ口公爵。母后陛下の次女ミリアニスの夫でもある彼は、この場にいる誰よりも温和な顔をしているが、グラディアトリア最強とうたわれる騎士団長である。

さらにこの会場には、入ってくるやいなや真っ先に母后陛下のもとへと飛んできて祝いを述べたロートリアス公爵もいる。彼は、先々代の皇帝の時代から財務大臣として仕える重鎮だ。

グラディアトリアには、シユタイアー公爵家を筆頭に、クロヴィスが当主を務めるリュネブルク公爵家、オルセオ口公爵家、ロートリアス公爵家の四つの公爵家があり、それらはまとめて、グラディアトリア四公爵家と呼ばれている。

その下に侯爵家、伯爵家、男爵家と続くが、権力を盾に不正や非道な行いをしていた貴族は先帝陛下の時代にことごとく肅清されて、今はそれぞれ全盛期の半分ほどの数になつてしまつていて。それでも、母后陛下の誕生日を祝うパーティに駆け付けた人々の数はたいそうなものだつた。

その招待客の中に見知った顔を見つけて、ルリは思わずクロヴィスの袖を引いた。

「クロヴィス様。アンナ様が……」

「ああ、先日のコルチネット家のお嬢さんですね」

父親であるコルチネット侯爵に手を取られて大広間に入つたアンナの顔が、突然ぱつと輝いた。その笑顔の先にいたのは、一人の男性。

「プレゼント作戦は、うまくいったのでしょうか……」

「うまくいくともわななければ困りますよ。あのカップケーキに使つたクリームチーズ、幾らしたと思つてるんですか。私が彼女の恋のスポンサーと言つても過言ではないでしょう」

そんなことを囁き合う二人の視線の先で、コルチネット侯爵は娘の手をその男性に譲る。するとアンナは頬を染めて彼を見上げた。

「の方が、アンナ様の好きな方でしようか？」

「おや、彼は確か……」

アンナの手を取つたのは、いかにも騎士らしい屈強な体格をした男だつた。

余計なお世話かもしれないが、甘いお菓子をプレゼントされて喜ぶ姿など想像できない。そんな、実に男らしい男である。

アンナのようなあどけない少女が恋する相手としては、随分イメージが違う……などと、失礼なことを思いつつ顔を見合わせたクロヴィスとルリの隣で、騎士団長であるオルセオ口公爵が楽しそうに口を開いた。

「おやおや。うちの第四隊の隊長が、随分可愛らしいレディをエスコートしているじゃないですか」

「ああ、やはりそうでしたか。確か、侯爵家の次男坊でしたよね？」

「ええ。彼もそろそろいい年なんですが、あの通りの厳つい面構えが災いして、なかなか良い相手に恵まれず……いやはや、のように可愛らしいお嬢さんとご縁があつたなんて、私も団長として安心しましたよ」

立ち読みサンプルはここまで